

令和元年度 沖縄県振興審議会
第5回文化観光スポーツ部会 議事要旨

令和元年11月20日（水） 15：00～17：00

議題

【沖縄21世紀ビジョン基本計画（沖縄振興計画）当総点検報告書（素案）】について
SDGsと沖縄21世紀ビジョン基本計画の関係について

【富田専門委員】

- 首里城について、沖縄の文化に携わる者として、首里城を失ったことは、身内を失ったような気持ちで言葉がないとよく聞く。どうしてだろうと思ったときに、首里城というシンボル、アイコンみたいな、実際に目に見えるもの、触れることができたものが失われてしまったことが大きい。
- でも、沖縄の有形・無形の文化はそれぞれの心の中にある。例えば芸能や空手はそれぞれの体の中に入っているもの、それ以外にも織物、染め物、焼き物、漆器など、琉球王国時代の文化はそれぞれの体に交ざり、気持ちの中に今も生き続けている。
- それらを見る化していく、首里城が再建されるまでの間、私たちの中にある琉球王国時代から脈々と受け継がれてきた目に見えないものを含めて、それぞれが中に持っているものをどうやって外の人たちと一緒に感じていくか。
- これまでも行政のサポートがあってここまで発展してきた。これからはより一層、県民の気持ちが強くなると思います。行政として、これまでやってきた施策の成果で、今の文化があることを、首里城が再建されるまでの間、サポートをしていく必要がある。

【ダルズ専門委員】

- もっと伝統文化に触れる。空手を実際にやることも自由だけれども、恐らく中学校で空手の授業時間が非常に少なく、これではわからない。前回も言ったように、見て感動する、そういう機会を学校現場で実施するのがよいと思っています。
- 世界1億3,000万人の愛好家の皆さんは空手に対する思いが大きくて、この人たちに支えてもらえるプラン、ウチナーンチュのネットワークがうまく活用されているのに、まだ空手のネットワークはうまく使っていない。今度のユネスコ登録に向けても、県民は応援するけれども、世界の空手家からも応援をもらえるようネットワークづくりが必要だと思う。

【渡嘉敷専門委員】

- 参考資料4ページ、健康長寿保健医療の部分ですが、実施率、そこら辺に関しては二極化が進んでいる状況は間違いない。ただ課題として、総合型地域スポーツクラブの充実が書かれていますが、現状として沖縄県は82%ぐらいの設置率はありますが、はたしてこれが確実に充実した動きをしている

のか、まだ疑問な部分がある。

- 総合型という形をとっている地域はたくさんありますが、実動していない現状も多々あるのは後で調査が必要ではないかと思っています。

【當山専門委員】

- 観光の世界は、日々、マーケットが多様化していて、常にアップデートされている。来年には新たな課題や新たなテーマが、観光分野では常に対応型のアップデートが進んでいる。それに柔軟に対応できるような県の姿勢が必要。計画に捉われることなく、文言が180度変わるかもしれない、戦略を180度変えないといけない、バージョンアップしなければならない場面が間違いなく出てくると思う。その辺の対応ができる連携が必要となる。
- 例えば首里城の焼失は想定外でした。でもマーケットから見ると、改めて姿なき首里城が新たな意味を持ち始めている。多くのお見舞いと、心からの連携が寄せられている。今後、文化財、文化観光のあり方は、とても重要な部分です。ここに書かれていない部分が、これから文言をどんどん付け加えていく必要がある。

【平田副部長】

- 21世紀ビジョン基本計画は、昔でいえば万国津梁の鐘の銘文。
「我々はこんなふうな生き方をします」ということを、琉球の民が高らかにうたい上げた万国津梁の鐘の銘文、その拠点としての首里城、動く首里城としては進貢船がある。
- 首里城が消失した今、21世紀ビジョンの中で、大きなビジョン・事業計画をしっかりと打ち立てていく必要がある。
- 来年の2020年、21世紀ビジョン基本計画の点検が終わって次のステップに進む。2021年のウチナーンチュ大会、2022年の復帰50周年と国民文化祭を考えたら、首里城との関わり合いは、特にウチナーンチュ大会においては、大きなテーマを持って海外の方々が沖縄に来る印象を受けます。
- 総点検の中では、全てを拾い上げることはできないが、きっと次のステップの中では、首里城の再建復興が、戦後の復興のように、豚を送ってくれたりしたようなことがいま既に始まっているわけですから、本当の意味で、もう一回芯の通った、形だけで、県民が誰も読まない21世紀ビジョンではなく、県民が誰でも見るような、万国津梁の鐘の銘文のようなシンボリックなものが必要である。

【下地部会長】

- 首里城の火災に対して審議会としてコメントを出すことはとても大事。21世紀ビジョンの中では、首里城は沖縄の文化の象徴・シンボルとして様々な各種施策が行われているはず。今皆さんが言われている自由意見の部分においては、あらためて首里城の意義の確認と首里城の再建に向けて、文化観光スポーツ交流部会の中では、重要なテーマになると明確に打ち出す必要がある。

【與那嶺専門委員】

- 例えば14番（別紙1修正意見）ですが、その挿入に関して賛成いたします。ウチナンチュとしての意識、アイデンティティの低下が懸念されている。その部分に対して、移住移民の経緯や困難を克服した歴史等に対する理解促進等を土台とした提言をしていくということですね。
- 例えば本の財団が行っているウチナンチュ子弟等留学受入事業でも、毎年、海外から県出身者の移住者の子弟等、そういう子どもたちを招いて県外の大学や企業で留学研修をさせている。ただ、それだけではなくて、本県の歴史や文化、習慣等それから県民との交流を通して、将来本県とまた出身国とのネットワークの架け橋になるように事業を進めている。また教育委員会でも記載にありますように、高校生を300名以上長期短期として県外に短期研修、留学等を行っている。ほとんど必ずその国に行けば、ハワイに行けばハワイの県人会、そして台湾に行けば台湾。それからドイツに行けばドイツの県人会と交流を行っている。
- そういう交流の中で、例えばこれはハワイだったと思うのですが、ハワイの移住者の歴史はどういう困難があるのか。交流の中で子どもたちにこの県人会の方々が、二世三世の方が我々はウチナンチュとしての誇りを持っていると、子どもたちに強く訴えていました。そういうものに触れ合うことによって、ウチナンチュとしての誇り、それからアイデンティティが少しずつ養われていくのかと思います。
- 618・619頁（総点検報告書素案）に多文化共生型社会の構築について記載されている部分がある。本県の外国人の在住者に関しては、年々増加していて、平成18年は1万4,285名とありますが、平成29年は1万5,847名、平成30年は1万8,000人を超えていると思います。先ほど言った交流のあり方は、今後、多文化共生型社会を構築する中で、意見として出てくると思います。

【佐野専門委員】

- 我々が懸念しているのは若い人だけアプローチするというのではなくて、やはりこの歴史があって特に今若い人たちもルーツを知って、そこからウチナンチュとしてのアイデンティティをさらに認識する。
ここまでの歴史がきちんとあってこそその若い世代へのアプローチということがよりイメージ的にわかるような課題設定、アジェンダセッティングをしていただけるとよいと思います。それが1点目です。
- SDGsについて、これは交流の域を超えるかもしれないですが、SDGsはこの21世紀ビジョンとの関係において、重要性を増した、あるいは新たに生じた課題というふうに捉えるべきと思っています。ITOP（島嶼観光政策）に参加させていただいたときに、サステナブルツーリズムの話もありましたので、この文化観光スポーツ部会の中で、このSDGs・サステナブルなディベロップメントについては、重要性を増した、あるいは新たに生じたという課題の整備の仕方をしてほしいのではないかなと思いました。

【平田副部長】

- 多文化共生の件ですが、伊田課長（交流推進課）と一緒にシドニーに、先々月はロンドンにも行ってきました。去年はシカゴそれからつい先週は福建省に行ってきたのですが、全て担っているのは沖縄人以外の若者たちが沖縄文化を結構盛り上げている。
- それに伴って、中心となっている県人会の皆さんと連携を図りながら、県人会のあり方自体を再構築しているところがうまくいっている。もっと言うと大きな曲がり角に来ているとすごく感じる。

- なので、県人会や若い世代だけに期待感を寄せるのは、ウチナーネットワークのネーミングからすると、少し弱いのかなという気がします。ウチナーネットワークは、ウチナーンチュでなくても沖縄が大好きで、文化を通じてつながっている人たちもウチナーネットワークという中に入ってくる。ウチナーネットワークが持っている、ゆるっとしたネットワーク感は、沖縄が持っている力強さや、したたかさだと思います。
- それを文化がつかないでいく、ウチナー文化を持っている人たちが多文化共生をどんどん起こしているということを考えると、次のウチナーンチュ大会を含めてこの中に書かれている文言の中に不足していると思われるのは、必ずしも若い世代だけにフォーカスをした文言だけでは弱いのではないかと思います。

【小島専門委員】

- 首里城について、衝撃的な映像から始まったあの日から行程の変更など現在進行形で影響を受けている。30年前を思い起こしてみると、守礼の門を見る行程が入っていた。そこに立ち返ると、観光としての行程、まず首里城に代わるものはない。代わりのもを入れてもお客さまは満足しない。これから必ず復興していく、必ずさせないといけない。守礼の門で写真を撮る、そこで首里城の歴史を聞く形の行程を、今後、復興までの過程で取り組んでいく必要がある。
- 今回の首里城の焼失は不幸なことであったが、県民が自分ごととして首里城をここまで思って、復興に向けて一つになれるというのはすごいこと。観光に関わっている皆さんは、首里城を全部見てお客様を案内するが、県民は正殿に入ったことがない方も多かった。首里城が焼失して初めて自分ごととして首里城を捉えて、必ず復興させたいということで一つになっている。県民が一つになって復興をしていければいいと思います。それを県内外、海外も含めて発信していけば首里城は必ず復興、復建できる。

【前田専門委員】

- 最近いろいろと2、3年で変わってしまう。今回この計画を立てていくときには、今思っている反省点も、もしかしたらまた変わっていくので、それを変えやすい仕組みができればいいと感じます。県民がちゃんと見る意味で言うと、このビジョンをアプリやタブレットで気軽に見られるようしたらよいと感じる。ケアンズ市に行ったら、アプリ型で市民サービスについてのアプリがだれでもダウンロードできる、多言語化されている。市のホームページでは多言語化していて日本人でも読めるようになっている。

【當山専門委員】

- 観光で交流の部分を見て散りばめられたキーワードを見ると国際交流、グローバル人材などが多く出て来るが、観光部会として感じるのは、持続可能なのというのは使い古された言葉ですが、我々の業界では、持続可能な観光推進地で必要なものというのは、さっきハワイの話もありましたけれども、ホストカルチャーって大事だということです。沖縄には約1,000万人の観光交流者が来ていて、いいか悪いかは別にして、米軍が存在していて若い人たちだけではなくて、たくさんの外国人スタッフが就労の定住者として沖縄に居を構えているという意味でいったら、これからの観光地、お客様を迎える中でのホストカルチャーの強化というのは、グローバル人材というのは、沖縄のアイデンティティをしっかりと有した超ローカル人をどう

育てていか。これは伝統文化も含めてというところだと思っていますから、ここはとても重要な分野だと思っています。

- やはり観光部会として、ありたい姿をつくるということであるから、一つの例として、観光先進地として観光条例の質と数はとても重要です。沖縄として観光条例の質と数をしっかりつくっていくと。沖縄って観光条例ものすごく多いよねと言われるぐらいでない、日本で一番の観光推進地にはなれないと思います。

【當山委員】

- S D G sについては、実は観光の機運はかなり前からしっかり取り組んでいまして、S D G sな地域が観光目的地として間違いなく選ばれるというのは、グローバルな観光トレンドのマーケットとしては出ています。
- 特筆すべきは、知的トラベラーがどんどん増えてきていますから、S D G sなトラベラーがどんどん増えてきているんですね。S D G sに寄与したいというトラベラーがどんどん増えていきます。

【佐野委員】

- 県が前から非常に取り組んできましたし、いろいろな業界でも取り組まれてきているということは本当に素晴らしいことだと思っています。我々はずっと途上国でS D G s達成のための支援をしてきている中で、沖縄が沖縄県民のために、県としてやろうとしているのはすごいことだと思っています。
- 21世紀ビジョンを余り読んだことがないかもしれないけど、S D G sは目新しいことがあって、皆さん今すごく関心を持たれています。これをテーマにしたフェスティバルを県と共催でやったところ、6,000人以上の方に来ていただいたりしています。うまくこのS D G sを広報的な観点からも使っていただくといいのかなと思っていますので、先ほどぜひ重要性を増した新たなとか、やはり何か入れ込んでいただきたいなと。この段階から、次の計画を待たずに入れ込んでいただきたいなと思います。

【富田委員】

- 私は一言、それぞれの文化・観光・スポーツ・交流、それぞれの分野で、きょう皆様のご意見を伺いながら、「うとぅいむち」というキーワードが何度も頭に浮かんできました。
- 首里城を失った今でも、私たちに脈々と受け継がれてきたウチナンチュのアイデンティティとか、琉球王国時代からの文化というものを、幾つかあると思うのですが、大きな柱の1つがやはり「うとぅいむち」、おもてなしの精神だと思っています。これは一人一人が心の中にとどめているものではあるのですが、ぜひこれからそれを見える化していくというか、県民それぞれが、それぞれいる分野の中で表現をしていくということがとても大切ではないかなと思いました。本当に皆様のご意見、そして県の皆様の真挚なご意見を伺って、大変勉強になった会でした。ありがとうございました。

【與那嶺委員】

- 先ほど自分が申し上げた多文化共生社会の構築というのは、交流の中でやったので、若干勘違い

して言葉足りずなのですが、実際618ページと619ページにはきちんと多文化共生社会に対してどうしていくのかという記載があるんです。

- 多文化共生社会で一番大切だと思うのは国籍や民族に関係なく誰もが安心して暮らせる社会づくりだと思うんですよ。先ほど申し上げたのは、これだけの外国人が在住しているのですが、その在住している外国人と県民が交流をして、きちんと交流した中で安心した社会づくりが今後必要になるのではないかと。これは国も推進しているところだと思います。財団でも災害時に外国人に対してどういった支援ができるかということで、災害時外国人支援サポーター養成とか、避難所運営訓練の実施とか、そういうものやって外国人との交流を深めていくという事業を行っております。今後も関係課と連携して、ぜひまたそういう交流の事業等をしっかり進めていきたいと思っています。ありがとうございました。

【佐野委員】

- 先ほどのウチナンチュのアイデンティティは、きつとぎりぎり定義を決めていくと大変なのかなと思うのですが、一方で、繰り返しになりますが、本当に沖縄が好きだという人はたくさんいるので、それだけでいくとももちろん多文化共生の観点からすごくいいことなんですけれども、私はそれこそ、(自分自身)内地の人間がアフリカから来て思ったのは、何かそれよりも強いものがあるなど。そのパワーが、今回の首里城のこともそうですけれども、沖縄を好きで、ファンで、サポーターという以上のものがウチナンチュという言葉にはあるなと思っているので、そこを何か言い表せるようないい定義というか、何かがあるといいなと。そうすると、次の世界のウチナンチュ大会も、もちろん誰でもウェルカムなんでしょうけれども、その何か気持ちのつながりというものがあると、それこそが沖縄ウチナンチュのパワーなのかなと思うので、これは引き続きいろいろなところで議論をなされていくことを期待しています。ありがとうございました。

【ダルズ委員】

- ほとんど発言していないけれどもいろいろな観点で勉強になっていて、自分でそれをどう活用できるかという、空手だけではなく、空手と観光、文化、あとはきょうも出たアイデンティティとかネットワーク。これは言葉だけなんだけど、それをどうやって実現していくかという。もちろんこれは沖縄県の振興計画なんだけれど、それに県民以外、いろいろな人がかかわっていく。そのネットワークをどうつくっていくかという。もちろんあることはあるんだけど、もっと活用できるのではないかなと。なので、さっきの(前田専門委員が話したケアンズ市の)アプリの話はとてもいいなと。もちろん、県民もそうなんだけど、沖縄のファン、世界にいる空手のファン、世界のファンはそれも恐らく気になると思うので、その国際版をつくってもおもしろいなと思っています。ありがとうございました。

【渡嘉敷委員】

- まず、事務局の皆さん、こんな膨大な資料、大変だったと思いますけど、ご苦労さまでした。700ページもあって、私もほとんど見ていません。スポーツに関する部分は目を通しましたけれども、ある程度苦労しながら、相当な時間をかけてつくった資料だろうなということに関心をしています。
- 我々体協というのは、普通は競技録とか、生涯スポーツの推進、あるいは青少年の育成というような

柱のもとで事業を進めている組織ですので、なかなか産業に絡めたスポーツとか、そこら辺がぴんとこないような状況がある中で、文化、観光、そこにスポーツという3つの柱のもとでいろいろな会議でいろいろな意見が聞けたというのは、大変勉強になったところです。今後、やはりスポーツというのは、オリンピックもありますけれども、それ以外でも国際の大会、いろいろ大会がありますので、アジアの中心になるような沖縄の中でいろいろなスポーツ合宿をしたり、交流ができればいいのかなというような感じを受けております。ただ、そのためにも沖縄の青少年がもっと力をつけて、いつでも、どこでも、どの国でもいらっしゃいというような力をつければ呼べますけれども、弱いチームがおいでと言ってもなかなか来ませんので、そこら辺はまた県を挙げて協力していただいて、やはりスポーツというものが表に出られるような沖縄をつくっていただければいいのかなと思いますので、そこら辺の協力も県のほうによろしくお願いをして終わりたいと思います。

【小島委員】

- きょうで最後ということで、何を置いてもこの委員会には出席させていただいて、ただ、JATA(日本旅行業協会)として出させていただきまして、正直観光という部分はかなり広い分野であり、この資料の中でもかなりのページを割かれているんですけども、なかなか読み込めず、この資料について、何ページ、何行目がどうだというような意見が全く言えていない中で、観光というのは本当に幅広い分野、インもアウトもあって、出るほうもあり、インバウンドもあり、それで観光と言うんですけども、日々変わっていくものですので、半年前のものが既にどんどん変わっていくんですね。
- 今日日々変わっていて、例えば、ダイナミックパッケージという航空会社さんからの料金表が出されているんですけども、それはどんどん日々変わっていく料金なので、旅行会社はパンフレットができない時代になるんです。そういった部分とか、いろいろなことがあります。その中で、こういった会議に参加させていただいたこと、それで皆さんのいろいろな広い意見が聞けたこと、とても勉強になりました。ありがとうございました。余り大した意見が言えなくて申しわけなかったんですけども、とても勉強になりました。ありがとうございました。

【前田委員】

- 先ほど與那嶺委員に多分誤解を与えたかもしれないのですが、外国人、うちは雇用をしているという責任もあるので、いろいろな不安を地元で、外国人が住むこと。外国人がこの名護の地に住んで生活していくということに対しては、しっかり雇用主としても責任を持たなくてはいけないと思っているので、他人事ではないのです。なので、このように安心して暮らしていける社会づくりが本当に大事なと思ったし、万国津梁の世界に渡り歩いていた琉球としてはいいなと思っているところで、本土のご出身だろうが、移住者だろうが、外国人だろうが、生粋のウチナンチュだろうが、みんなでチムグクルでおもてなししているので、それが「うとぅいむち」なのです。なので、アイデンティティというのはそこかなと思ったり、そういうことでは別に関係なくというか、それが大事なものというのをきちんとみんなで理解してやっているの、一個人の会社でいえば、個人というか、小さい一集合体でいえば、それを大事にやっついこうねとやっているの、移住者だろうが、外国人だろうが、分け隔てなくやっていますから、沖縄はそういうところの懐の深さ、

さっき佐野さんもおっしゃったウチナンチュというパワーとか、そういうところを今回の委員会でいろいろなスポーツや、空手や、文化の皆さんのお話を聞いてとても勉強になりましたし、また深みが増した気がしています。

【當山委員】

- 観光でいったら間違いなくキープレーヤーはウチナンチュと41市町村です。そういった意味でいくとSDGsの世界を早目につくって、ウチナンチュって地球人だよねと言われたいんですね。25年までに頑張りましょう。25年に実現しましょう。よろしくお祈りします。以上です。

【平田副部長】

- 首里城の話が出ましたが、今回のキーワードはセレブレーション・オブ・ライフ、ウチナーグチで言えばヌチヌグスージサビラ(命のお祝いをしましょう)。小那覇舞天がそれを言ったときに、周りの人たちから笑われて、むしろ怒られて、人が死んだというのに命をお祝いしようとは何事だと言われたといいます。今となっては、それはすごいウチナンチュのスピリッツを体現した言葉となっている。
- 組踊上演300年の節目は今年しかないので、首里城が焼け落ちたならば、焼け落ちた首里城を背にしてでも300年をお祝いするべきだと、それを50年、100年後の人たちが写真で見たときに、「そういう時代でやっていたんだね」と語られることがあるかもしれない。
- いろいろと規制があるかもしれませんが、逆境に強い沖縄魂というのは、今回の首里城から学んだことです。そして、復興ツーリズムが3.11以降にありましたが、ぜひ観光分野でも、ありのままの姿の沖縄を見せていくと、一緒になって築城ツーリズムや再建ツーリズム、もっといえば琉球ルネサンスツアーでもいいですが、これを機にもう一回ウチナンチュの思いというものを、ルネサンスを迎えていくのだという、逆転の発想で生きていくのがウチナンチュらしいのではないかと。
- 今、子供たちは通常、例えば舞台で国頭(クンジャン)サバクイを踊ったりする。国頭サバクイは首里城築城の歌で、今まで当たり前で踊っていた踊りというのがリアルに今は感じられる。ヤンバルの木を切り倒して持って来る。「これはウゼモク(御材木)だよ」と、歌詞も含めて生きた学び、教育をここから得ていかないといけない。本当に消失感、喪失感だけではないかと思ったりする。なので、文化の住人としては、そういう情熱で、20年、30年かかろうが、みんなで一緒に首里城築城を体験していくような人生に今、立ち会えて逆によかったなと思っています。

【下地部長】

- 今いろいろなお意見が出ましたが、最後に、観光を勉強し始めたときに、観光は平和へのパスポートという、ツーリズムパスポートとピースという言葉は国連で、1962年に決議をした言葉です。このインパクトをずっと持ち続けています。観光は基本は文化ですし、人との交流ですし、スポーツは平和の祭典ということもありますし、この文化・観光・スポーツの分野というのは平和実現に向けての1つのパスポートという意味合いというのはとても大きいなと思っています。
- 平田さんからもありましたが、今回の首里城の件は我々ももう一度自分事として捉えて、それぞれ

の立場で前に向かう材料があると思いますので、それがまた結集するときに沖縄の新しいスタートになる日でもあるのではないかなと思っています。今回の審議会でいろいろまとめさせていただいて、審議会は終わりですけども、これは終わりではなくて次への始まりになっていきますので、次の計画に向けて、環境の変化が非常に激しい中ですので、また日々新しい情報も盛り込みながら取り組んでいく必要があるかなと思っています。

以上